

松尾芭蕉の俳句の韓国語翻訳の可能性を探る

黄 善裕

．はじめに

極端に短い17字の暗号のような詩がある。それは俳句。

俳句は日本の伝統的な詩であり、今でも大衆に非常に人気があるが、今日は日本のものだけでは無くなってきた。第二次世界大戦後、欧米では俳句の翻訳書と解説書が刊行され、自分たちの言語で俳句を作る作者が増えるようになった。アメリカの場合、小学校の教科書に松尾芭蕉と小林一茶の作品を載せてあり、世界各地からは俳句のコンクールも多く行われている。

なぜ、今になって俳句なのかという疑問を抱いてみよう。現代の社会は速度、機能、豊かさ、論理を常に追求し、すべてが明らかな確かなものを求めている。そして無感覚になり、自然の移り変わりさえも忘れていく。刺激から楽しさを探している若者も増えている。だが俳句はこれとは反対だ。速度よりはわざと昔の感覚を辿っていく、豊かさよりは余白を、確かな物よりは隠れた魅力を、ドラマチックよりは日常の美しさを探し出し、自然の中で季節的な情緒を借りて表現しようとする余裕があるのだ。現在インターネット本屋に載ってある俳句関連の書籍が数千冊もあるとはいえ、その中から韓国語で翻訳された俳句翻訳書を探すのは大変難しく、まれである。世界俳句と呼ばれるようになった現在、なぜか韓国だけが情勢に乗り遅れているのは確かだ。

実際、韓国では日本文学について知りたい且つ無視したいような複雑な情緒があるため、俳句がほとんど紹介されていないのが実情である。韓国の多くの詩人は日本が近くにありながらも、アメリカや、フランスで出版されている英語や、フランス語の俳句に初めて接して、衝撃を受けたという。韓国で出版されている数少ない俳句の翻訳集から英訳された俳句を重訳した跡が見える理由もここにある。ところで、俳句を韓国語に翻訳するには困難な点がいくつかある。その一つは作品の中に使われている単語の結びつきに省略が多く、意味のつながりが希薄なことである。その結果、作品から読み取れる意味が多様になり、読み手に複数の解釈を可能にさせることである。もちろん、解釈の多様性は、俳句に深い味わいを持たせるという情緒的な豊かさを与えてくれる。しかし、俳句を外国語に翻訳すると、「多様な解釈」は「多様な翻訳」を生み出すこととなる。本研究では、松尾芭蕉の俳句を採り上げ、その韓国語の翻訳の多様性と起源について考察する。

．本文

1. 俳句の翻訳は可能なのか？

俳句の一番大きな特徴は 5・7・5 という定型と、その表現が含んでいる多様な意味である。17 字という約束を表現的余白の美を生かして韓国語の 5・7・5 字で表すのはまず不可能と言われる。俳句に含まれた言葉は日本特有の情緒と、発音から生み出された聴覚的・音楽的な韻律、風土的・歴史的意味などを持っているため、日本語でなければその定型の約束を守るとは簡単ではない。実際欧米では言葉の成り立ちが違うので定型がはまらず、あくまでも自由な短い詩という形になっているが、中国や、韓国では昔から定型詩があったので、型を守ることや翻訳はむしろ難しい。これは必ずしも俳句に限らない。詩は言語の持つ独特な響きと含蓄を備えているため、もっとも適切な言葉を選んで翻訳をしたつもりでも、その詩の本当の味は味わえないし、母国語の持つ伝統的なニュアンスとずれる時、詩想は全然違うものになってしまう。特に俳句の場合、極度に短いため注釈をつけられないという難点を持っている。短いからこそ美しい俳句は、短いからこそ翻訳が難解極まりないのである。

1) 季語

俳句が理解できる鍵を握っている一つの特徴は季語だ。

四季を持っている日本の自然の豊かさを句の中で生かし、季語が入っていることによって、必ずどの季節を詠っているのかが分かる。季語は季節的な美を表すとともに変わって去りゆく物に哀愁をもたらせ、刹那の美を賛美する日本人の嗜好の表れである。火山、地震、台風といった天災が多く、雨が多い、天気の変わりが激しく、何もかに対して、絶対的に確信できなかった自然環境から自然に生まれた日本人の美学なのだ。季語の中には昔の詩人達によって作られた季節感があり、それは今の人々にも同時に味わえる共通点をもたらせ、その二つを繋ぐ、いわゆるパイプの役割を果たしているのだ。最近、韓国では、人気のある詩人が翻訳俳句集を出したり、インターネット上で俳句を紹介している個人ホームページが増えるなど、注目を浴びているが、その理由として、韓国人が忘れていた季節的情緒に対するノスタルジアを呼び起こすという想いがある。

だが、季語のイメージは相当分かりにくく、翻訳するには大変な苦労がかかる。確かに、地理的に一番近い外国という事から四季の移り変わりが似ている韓国は、それは一つの苦労をしなくて済む点だと言えるだろう。しかし、日本の季節と全く同じ訳ではなく、島国という特徴は温帯と亜熱帯気候が同時に存在しているため、韓国より雨が多く、また湿度が激しいという違いがあり、必ずしも簡単に翻訳できない所である。雨が多いということは、それほど天気の変化が激しいということでもある。日本の雨に対する名称や、その降

り方を表す言葉は、季節によって数えられないほど多様で、韓国語より遙かに多い。多分どの言語より多いと思う。(実に多くの留学生がすごく難しがっているし、迷っている部分でもある。) 俳句では季語が雨の場合、主に春雨、五月雨、時雨などに分けて詠んでいるが、各雨には独特なイメージがついているのでまた困惑する。春雨は濡れるようで、濡れないようでいつまでも降り続く甘美な雨のイメージである。実を言うと、春雨が激しく降る時もあるが、俳句の中で‘春雨’と詠まれるとその雨は決して激しい雨ではない。多くの日本人は春雨はこういうものだとか感するのであろう。

それに対し、五月雨は梅雨の事を指し、夏の前に長い間降り続ける陰鬱な雨のイメージであり、時雨は初冬の急に降り出す雨から無常流転の嘆かわしいイメージを持ち、初冬の寂しい風景や、叙情的には寂しくむなしい気持ちを表してきた。このような雨による様々な植物、変化無双な気候、内向的な日本人の性向などの要素は俳句の韓国翻訳への道をより難しくさせる。

次に時雨が季語の芭蕉の句と、その韓国語翻訳を比べてみる。

<草枕犬も時雨>かよるのこゑ 「野ざらし紀行」

この句は松尾芭蕉が旅寝の枕にきこえる犬の遠吠えを、犬も時雨の侘びしさにたえかねているだろうかと自分の心に移入して詠んだものだ。

♠草枕やあの犬にも雨は降るのか深夜の声 (ユオッヒ)

..... / /

◎旅路の宿初冬雨に乗って遠き所の犬の声 (キムジョンレ)

..... / /

韓国語で時雨を訳せば初冬雨としか表現できず、それも「初冬+雨」の形になり、韓国人にとって芭蕉が感じた侘びしきや、季語が持つそのままのイメージは感じにくい。ユオッヒ教授の句の場合、時雨はあえて雨だけで表現しており、芭蕉の句そのままを伝えようとする意図が見える。だが本に載せてある注釈を読まないで季節や、草枕の持つ旅路というイメージを理解するのは非常に難しい。それに対して、キムジョンレ教授の句の場合、旅路の宿という表現を使って、初冬の雨が伝えられなかった寂しさや侘びしきを伝えようとした。最後の犬の声は芭蕉の句とは異なるが、その時の芭蕉の状況などを、翻訳者が理解したことを読者に伝えようとしている。

次は夏衣が季語の句の翻訳を比較した。

<夏衣いまだ風をとりつくさず> 「野ざらし紀行」

長旅を終えて、草庵に帰り着いたが、旅の疲れの物憂さもはれず、まだ道々で、移された夏衣の風もそのままできて、衣更えもせず、長旅ぼけのためか、まだ草庵生活のペースを取り戻さないで、遊意の名残をなつかしんでいる有様を詠った。季語は「夏衣」。

㊦すり切れた夏衣いまだ風をとりくつさず (ユオツヒ)

..... / /

㊦夏に着ていた我が服、その中にいまだとれない風がいる (リュシファ)

..... / /

㊦旅中着替えたあの夏衣いまだ風をとらないでいる (キムジョンレ)

..... / /

この句の季語は夏衣、韓国には衣更えという単語自体が存在しない。暑くなったら半袖、寒くなったら長袖で、それは個人が決める事で、日にちなどがあるものではなかったのがある。私も最初日本語を習った時、理解しにくかった言葉が衣更えだった。

芭蕉の句ではただの夏衣だったが、ユオツヒ教授の場合、「すり切れた」という表現を加え、長い旅を連想させる。だが季語はそのままの夏衣。詩人リュシファ氏の場合は「夏に着ていた我が服」というはっきりと違う表現を選んで、もう草庵で衣更えを終えたような印象を残す。キムジョンレ教授の場合は、「旅行中着替えたあの夏衣」という形で、すでに衣更えは旅行中に終えたという風を感じさせる。同じ紀行文で、同じ句の翻訳なのに三人の表現が全部異なるとはいかに多様な解釈が可能なのかを証明している。

2) 定型

*575の音律

韓国の定型詩・詩調は 3 4 3 4/3 4 3 4/3 5 4 3 の音律を守って作る詩で、定型であるのは俳句と同じだが、43字もあるのに対して俳句は17字、まさに世界で一番短い詩である。日本人は、この17字は読んでみれば簡潔に絞られていながら、意外に飽きさせなく、安定と変化を同時に持つ完璧な詩型だという。それに五七、七五というこの音律は日本人が覚えやすい形なのである。日本の詩歌の元祖は記紀歌謡（古事記、日本書紀に記された古代歌謡）と言われているが記紀歌謡は、全部五七調、七五調である。

自分の気持ちを相手に強く訴える時は、言葉を一文字ではなく、かたまりにして伝えると効果的で、特に奇数のかたまりを好み、その中でも五七のかたまりが良かったため、七五調で詩歌を作ったのである。

ちなみに、覚えやすいというのは暗誦を誘発し、その暗誦性は俳句を詠む喜びとそれを耳で聞く楽しみを感じさせ、ひいては口誦性を誘発する。因って、ひらがなの同じ行を使って舌の撥ねや、唇の動きのある句、リズム感のある句を求めるようになる。

ところが、そのような優れた作品などは違う言語で翻訳する時、一つのうまさを無くしてしまうので読者にその感じを上手に伝えるのは非常に難しく、翻訳家の腕が問われる所でもある。

次の句を通して比べて見たい。

<旅に病んで夢は枯野をかけ廻る> 「笈日記」

この句は芭蕉の最後の句である。旅中病にたおれ、うとうと眠る夜々の夢は、あちらの枯野、こちらの枯野と、寒々とした枯野をかけ回る夢を見るという、死の前で超然とせず、に断末魔でさえ旅の妄執を捨てられない詩人の最期がむしろ心打たれる。季語は「枯野」で冬。

♠放浪に病んで夢は枯野をかけ廻る (ユオツヒ)

..... / /
6 7 5

♠旅中に病みを得、夢の中でひたすら枯野をかけ廻る (リュシファ)

..... / /
8 6 10

この句はいわば「字余り」の句で、一字多いだけだが、この句を韓国語で翻訳してみると、まずユオツヒ教授の場合、六七五調になり、ちょうど芭蕉の句と同じくなる。訳もほぼ同じで、旅を放浪という風に表現したのが特徴だと言える。それに比べ、詩人リュシファ氏の句は八六調になり、前者が16字で訳せたのに対し、世界で一番短い詩と言えるだろうかという疑問を感じさせる。だがその内容の面ではわざと長くなるのを覚悟したかのような表現が目立つ。「旅中に病みを得」とか「ひたすら」などの強調した表現ではこの不世出の詩人のもっぱら旅を慕った最後の煩悩にふさわしい表現であり、リュシファ氏が訳した句からもやはりリュシファ氏の詩人らしさが感じられる。

3) 切れ字

俳句の三番目の約束は切れ字が入るべきという事だ。

切れ字の役割は、短い句のある部分を切る事によって俳句が散文のように単調になって

しまう事を防ぎ、俳句のイメージの世界を拡大させる。細かい切れによって弾みが生まれ
たり、切れの強弱・バランスによって意味を伝えやすくする事も可能である。

切れ字に該当する韓国語の単語も幾つかあるが、それに対しては意見が分かれる。韓国
のゲミョン大学のユオッヒ教授は、「ーや！」という詠嘆型助詞は、韓国で陳腐と思われ、
最近の使用が減りつつあるが、作家の意図や意味を断絶するためには使うべきで、韓国内
で出版されている俳句集の中で本来意味を十分に生かしていない翻訳が目立つ、と言う。
それに句が叙述になってしまう事があり、名詞の切れの場合は、強い余韻を残すために終
わりも叙述ではなく名詞で終わらせることを強調する。

それに対しジョンナン大学のキムジョンレ教授は、そのような単語に限らず意味上切断
されていればいいという意見を示している。どちらであれ、読者の胸にうまく響く翻訳が
よいだろうが、これもまた俳句の翻訳の難しさのひとつである。ともかくその切れ字によ
って17字の俳句がややもすれば標語みたいな感じになるのを塞げることができる。

次の句を見てみよう。

<旅人と我名よばれん初しぐれ> 「笈の小文」

いよいよ初時雨も近く、行き先も定まらない旅人の境涯を味わうにはちょうどいい季節。
さあ旅に出よう。旅に出て、道々旅人と呼ばれて行こう。

この句にはただ呼ばれるだけの意味ではなく、令名高き芭蕉翁から無名の旅人に身も心
も変身したいという決意と、人々にそのようなものと認めてほしいという願望が込められ
ている。

季語は「初しぐれ」で冬。

♣旅人と／我名よんでくれ／初しぐれ (ユオッヒ)

..... /..... /.....

♣時雨れてる／我が名は／‘旅人’ (リュシファ)

..... /..... / ‘.....’

この句の中での切れは「旅人と」の“と”が当てはまるが、切れ字を守るべきだと主張
しているユオッヒ教授はさすがにちゃんと守って、芭蕉の句そのままのように伝えようと
しているのが分かる。ただ「よんでくれ」と表現されているのは、韓国では受け身の表現
が少なく、ほとんど使われていないため「呼ばれたい」よりは「呼んでくれ」の方が読者
にとって分かりやすいと思ったらしい。詩人リュシファ氏の場合は、翻訳の内容も結構異

なるが、切れ字のあるべき部分に大胆に動詞を使ったのが面白い。最後の部分を‘旅人’
と終わらせたのは句を詠んだ芭蕉や前者の翻訳より強いイメージが句に込められて伝わっ
てくる。しかしかなり恣意的に翻訳した句に思われる。

<命二ツの中に生たる桜哉> 「野ざらし紀行」

旧友と自分と、二つの命が生きながらえて、再会し得た今、この再会の場に年々に咲き
続けてきた桜の花が、爛漫と咲きにおっている事よ。季語は「桜」で春。

♀命二つの中／その歳月そびえ立って／咲き続ける桜かな (キムジョンレ)

．．．．．／．．．．．／．．．．．

♀私達二人の生涯、／その中に／桜の生涯がある (リュシファ)

．．．．．，／．．．．／．．．．．

この句には「かな」という切れ字が使われており、その韓国語の翻訳を比べてみた。「か
な」という切れ字は句のおしまいに使われる事が多く、この句のように、感情がこもって
いい響きが出てくる。まずキムジョンレ教授の訳の場合、「かな」にあてはまる韓国語の表
現を適切に使い、古風ながら感情のこもった「かな」のイメージをよく生かしている。そ
れに対し、詩人リュシファ氏の句は本来の芭蕉の句とはだいぶその形が違っており、最後
は動詞を使ってまとめ、切れ字「かな」の持つニュアンスは全く伝わって来ない。自分の
イメージを翻訳の句の中に生かすのもいいが、そのせいで本来の句の味わいが薄くなるの
はどうだろう。

4) 歌枕

日本で親しまれている有名俳句の中で一番翻訳しにくい句は地名と関係のある俳句であ
る。優れている景色、あるいは歴史的な事件と関わって、日本人なら誰でも知っている地
名が俳句の中では数多く登場するのである。このような地名は単なる地名として存在する
のではなく、古来から数え切れないほど詠まれて来た有名句と共に伝承されるが、このよ
うな事を歌枕といい、整理し記録され、それがまた後世の俳人の手引きとなり、その地域
は観光資源として開発される。

<荒海や佐渡によこたふ天の河> 「奥の細道」

出雲崎から日本海のかなたに佐渡島がある。そこは古来多くの人々が流罪にあって悲運
を嘆いたところであり、一方また黄金が掘られたりして、人間の喜怒哀楽が渦巻いてきた

島である。しかしいま、夜空を仰ぎ見ると、そんな人間の些事とは無関係に、広々と澄んだ秋の夜空をかぎって、天の川が佐渡島にかけて大きく横たわっている。廣大無辺な自然の前で微々たる存在の悲しさを感じる。季語は「天の川」で秋。

◀荒海や佐渡島に横たわった夜空銀河（ユオッヒ）

・・・・・・・・！／・・・・・・・・／・・・・・・・・

このような歌枕を翻訳したのは本稿で比べてきた3人の中でたった一人ユオッヒ教授しかいない。これはどれくらい歌枕の翻訳が難しいのかをよく表している点でもある。ユオッヒ教授の翻訳書の中で歌枕の俳句はその注釈が非常に長く、詠まないと絶対分からない句ではあるが、より多くの俳句の普及を望むなら恐れずにどんどん翻訳していく必要があると思う。そのような意味で歌枕の翻訳は絶対乗り越えるべき宿題である。

・ 終わりに

これまで俳句の韓国語翻訳の可能性について松尾芭蕉の句を中心に考察してみた。翻訳家の色んな形の解釈は句の中に内包されている季語、切れ字、定型によって生まれるもので、俳句の必修条件でもある。これらは意味の規制にも作用しているとも言える。

多様な解釈を生み出すもう一つの背景は、俳句の根元にある論理の明快さをさける作家の創作態度と、それによる表現を俳句らしさの一つとして日本の研究者らが肯定的に受け入れることが、俳句の特色となっていることだ。また読者も論理的な意味の把握よりは体験的な詩の世界を楽しむ傾向が強い。しかしそれは作者と受容者が共通の風土に存在する場合であり、両者の文化が違う場合は、翻訳句の意味に微妙な差ができることは避けられない。因って同じ文化圏の人に比べ、違う文化圏の人は俳句の表現が何倍も曖昧に感じられるしかない。このことによる翻訳の困難さが、読者に表現の隙間を埋めようとする欲求を引き起こすことによって、各自の想像に満ちた解釈を生む喜びを与えるきっかけとして作用するのではないかと思う。それは俳句が‘雲を掴むような遠い世界’ではなく、表現の隙間を埋める喜びを与え、作品の解釈に読者の関与を積極的に誘導するという点から‘親しみやすい身近な世界’と変わるだろう。

実際、キムジョンレ教授と詩人リュシファ氏の翻訳俳句集の売れ行きを比べてみると、なるべく芭蕉の句そのままを読者に伝えようとしたキムジョンレ教授の翻訳俳句集より、破格の翻訳が目立つ詩人リュシファ氏の俳句集のほうが遙かに人気を集めている。以前から俳句を知っていた人達が求めるのはキムジョンレ教授の本だが、日本語が分からなくても、俳句を知らなくても、簡単に俳句に接して、楽しんで、身近だと感じられるのは詩人

リュシファ氏の方だということだ。それがどれだけ本来の句とずれているか、ずれていないかは気にせずに。だが、これは俳句の翻訳の可能性の一つの青信号と見てもいい。

最近韓国での俳句の普及を懸念する声もあるという。極度に言語が省略され主体の思想と行動に重点を置かないということから、俳句はいたって日本的な文芸形態の一つである。あまりにもニッポンらしくて国民の情緒に合わないなどの意見もあるが、それより韓国の俳句研究者達は、すでに時代に遅れていることを認識し、俳句を理解するのに必要な切れ字、季語などについて研究に積極的に取り組むべきだ。それにこのような事実を生かして作者の意図から遠ざからないようにしながら、より多くの韓国人の読者に親しまれる翻訳も、さらなる課題の一つだと思う。韓国でのより多くの人々からの関心を望みながら、私も研究して行きたい。

引用文献

井本農一・堀信夫・村松友次（1979）『松尾芭蕉集』小学館。

ユオッヒ（1998）『松尾芭蕉の俳句』ミンウンサ。

リュシファ（2002）『ハジギルトノムギルダ』図書出版イレ。

キムジョンレ訳文『野ざらし紀行』

キムジョンレ訳文『笈の小文紀行』